



# ともにお客さまを支える大切な仲間。



## 小

さなころからスーツに興味を持っていた私。それは紳士服屋を経営していた祖父の姿でした。誂えでスーツを仕立てるのが当たり前だった時代、これからは既製服が売れるようになると読み、時代に先駆け「紳士既製服小売店」を立ちあげ事業は大成しました。そして祖父の起業から90年後、既製服が当たりまえの時代に孫である私が真逆の「誂え服屋」としてイェルサルトを立ちあげるといふ不思議なご縁。形はちがえど想いを受け継ぎ祖父も喜んでくれていると思います。しかし私はずっと「スーツは似合わない」というコンプレックスを持っていたのです。それは私の「なで肩」という体型によるもの。しかも肩幅が狭いので肩にかけたバッグがすぐにずり落ちてくるのです。ファッションに興味がはじめた高校生のころ人気があったのが吉川晃司さん。長い手足にくわえ筋肉隆々でひろい肩幅。私にはないものばかりを持っている。「カッコよく制服を着るためには広い肩幅じゃないといけない」。そう考えた私は母の肩パットを借り制服に付けていました。しかし生まれではじめてオーダーでスーツを誂えたときにそのコンプレックスがなくなりました。25歳のときでした。友人に紹介してもらった西麻布のお店。ジャズが流れるお店で恭しい接客をうけ、エスプレッソを頂きながら仕立てるスーツ。なにか急に大人の階段をのぼった気がしたものです。そして仕立てあがったスーツを着て鏡の前になった瞬間おどろきました。コンプレックスだったなで肩が今までに見たことのないような芸術的な美しい曲線を描いていたのです。

なにがおつたのだろうか?!店主に聞いてみると衝撃的なことを教えてくれました。「イタリア、なかでもナポリ仕立てのスーツは肩線が落ちているのが特徴。まるでヴェスヴィオ火山の丘陵のように。だからなで肩の人のほうが似合うんだよ」。いままでコンプレックスの塊でしかなかった自分の狭いなで肩が、この瞬間にとんでもなく愛おしいものに見えてきて、着るのが楽しくなり何着もそのお店で仕立てていただきました。店主と仲良くなるなかで私のスーツを仕立ててくれたのが「aldex」という愛知県豊橋市にある工房で、ナポリ仕立てのスーツを日本でもっとも高い技術で仕立てていることを教えてくれました。そしてそこから11年後イェルサルトを立ち上げることになり「あの感動を多くの人に届けたい」